

落葉

道路側に枝をさしのべている
丈高い大樹がある

木の下には人が集まりやすい
朝九時半 幼稚園の送迎バスが止まる
待ちかねていた園児たち

「先生 お早うございます」
「お早うございます」

賑やかな声があふれバスは走る
落葉が一枚はらりとゆれながら地に落ちる

しばらく静かな刻が流れるが
昼近く町内で葬儀でも行われるのか
一人二人と喪服姿の老女たちが集まってきた
話は亡くなった人のこと 皆思い出すことが多い
しばらく話が弾む

「ええ（良い）往生でしたね」
人が言うと言わずく
これは仲間に捧げる最高の誉め言葉といえるだろう
そこへまた喪服姿の一人が寄ってきて
これで人数が揃った 告別式場へと向う
落葉ははらと地に落ちていく

一枚の落葉が少し離れた角地へ飛んだ
バイクを修理する青年がいる

青年は学校へ通って覚えたのだろうか

それとも独学で習ったのだろうか

それはわからないが自信のある手つきである

熱心に工具をふるう

誰も立ち止まる人もいない静かな住宅街である

青年の膝のあたりまで秋の陽が差しこんできた

側溝の傍らで落葉は陽を浴び

そしてそのまま動かない

ホノルルマラソンの前夜

往路は七時間くらいですが
でも帰路は地球の自転と同じ方向ですからね
もう少し時間がかかります

一緒に見上げる漆黒の夜空 南国の木々は
丈高くレースのように枝を拡げて
美しく夜空をいろどっている

林立するビルから舞い降りてくる光の花びらを手に受けて
私達は楽園の通りを歩いた

行手にホテルが見えてきた
入口に人が集まっている

人々の賑やかなおしゃべりがあたりを明るくしている
そして美しく整備された道路が

明け方に向って白くゆるやかに伸びている

これがマラソンコースなのだろう
目をこらしていると

あつ誰か一人のランナーがこちらに向って走ってくる
マラソンの開始を待ちきれず一人で走り出したのだろうか
ランナーは私たちの前を飛鳥のように駆け抜けると

浜辺に沿った彼方へと走り去っていった

ギリシヤ神殿に似た高い柱が立つ建物
ホテルは夜目にも美しい

やがて朝ともなればブラスバンドの音楽が
賑やかに飾られたこの広場を建物をおおいつくすことだろう
人々はその楽しさを待ちわびて集まっているのだ

そう　そう　私の肩に止まっている光の花びらがあつた
忘れていた

あの林立するビルから舞い降りてきた花びらは
部屋に入ろうとした私の肩に止まっている

手を伸ばして外そうとしたが

花びらはすると私の手からそれで廊下へ落ちた
そして廊下の隅でゆるやかな光をくり返している
まるでハイビスカスの花に似て美しく